

ニホンジカの広域連携の促進に向けた取り組み

1. 都道府県によるモニタリングの実施状況と、広域的な調整について

都道府県が実施する、ニホンジカの生息動向や被害等に関するモニタリングは特定計画に基づき実施されているため、都道府県内の状況や都合によって実施設計されている事が多い。しかし、ニホンジカの分布が都道府県境を超えている場合には、隣接都道府県が連携してニホンジカの管理を実施することが効果的である。この際、モニタリングについても連携することで管理に関する検討が行いやすいとともに、効率性の向上も期待できる。

ここでは、モニタリングの実施状況について把握し、広域的な視点に基づきモニタリングの効率性の向上に関する調整について検討する。

(1) モニタリングの実施状況

生息動向に関するモニタリングと、農林業被害や生態系影響に関するモニタリングについて、近年の実施状況に関する情報をアンケート等により収集した。主な収集情報は、実施場所、実施手法、実施年度である。

1) 東北地方

① 実施場所

青森県、岩手県、宮城県、福島県で生息動向に関するモニタリングが実施されていた。

② 実施手法

モニタリングを実施している県のうち、青森県、岩手県、宮城県で糞塊法が用いられていた。

このほか、青森県ではライトセンサス法が、宮城県では区画法が実施されていた。

福島県では咆哮調査が実施されていた。

③ 実施年度

調査開始年は異なるものの、青森県、岩手県、宮城県では糞塊法が毎年実施されていた。

2) 関東地方

① 実施場所

茨城県を除く全ての都県で生息動向に関するモニタリングが実施されていた。

分布が確認されているにもかかわらず、調査が実施されていない地域がいくつか見られた。

② 実施手法

ほとんどの都県で複数の手法で調査されており、全ての都県で糞塊法が用いられていた。

③ 実施年度

ほぼすべての県で毎年調査が実施されていた。

3) 中部地方

①実施場所

高標高域と拡大域の一部で、調査範囲が分布をカバーしていなかった。

②実施手法

糞塊法を用いる県が多いものの、長野県、静岡県では糞粒法を用いていた。

③実施年度

毎年実施する県が多い一方、長野県、岐阜県、愛知県では年を明けて実施していた。

4) 近畿地方

①実施場所

一部の地域で、調査範囲が分布をカバーしていなかった。

②実施手法

全ての県で糞塊法が用いられていたが、大阪府では糞塊除去法が用いられていた。

③実施年度

情報が収集できた県では毎年実施されていた。

5) 中国地方

①実施場所

全ての県で生息動向に関するモニタリングが実施されていたが、一部分布が疎な地域では、調査が実施されていなかった。

②実施手法

島根県を除く県では、糞塊法が用いられていた。

③実施年度

全ての県で毎年モニタリングが実施されていた。

6) 四国地方

①実施場所

全ての県で生息動向に関するモニタリングが実施されていたが、一部分布が疎な地域では、調査が実施されていなかった。

②実施手法

複数の手法で調査を実施している県もあるが、全ての県で糞塊法が用いられていた。

③実施年度

ほぼすべての県で毎年調査が実施されていた。

7) 九州地方

①実施場所

ほぼ全ての県で、生息動向に関するモニタリングが実施されていたが、一部分布が疎な地域では、調査が実施されていない地域があった。

②実施手法

佐賀県、長崎県を除き、糞粒法を用いて実施していた。

③実施年度

ほぼすべての県で毎年調査が実施されていた。

8) まとめ

分布に対し比較的均等に調査地が設定されており、各都道府県の情報を収集することで、広域的な地域及び国内全体の生息動向を把握できる可能性が示された。

一方で、分布拡大地域等、分布が疎な地域で調査が実施されていないことが多く、理由としては、調査手法の技術的な問題や調査地として優先順位が低いため等が考えられる。

このような地域において把握すべきことは何かを検討し、具体的にどういった調査・情報収集が必要か、技術的な側面も含め検討する必要がある。

糞塊法が多く用いられていたが、糞塊法以外の手法のみで実施している県も見られ、九州地方では糞粒法が多く用いられていた。全国的に手法を統一し、調査労力の最適化・精度の向上を図ることも重要だが、一方で積み重なったデータも貴重であるため、どういったかたちがその地域にとってよいものか検討する必要がある。

毎年モニタリング調査を実施する県が多かった。一方で、一部の県では数年に1回程度の実施間隔であった。毎年実施すべき調査（継続したデータが必要）とある程度の間隔でも（比較的）問題ない調査についての違いを都道府県に技術的に指導する必要がある。

2. 東北地方における都道府県行政担当者を対象としたニホンジカ管理に関する勉強会の開催

東北地方のニホンジカの分布は宮城県の金華山島と岩手県南東部に位置する五葉山周辺の地域に限られていたが（環境庁、1979）、1970年代以降、これらの地域では捕獲数が増加し、農林業被害が発生する様になった。その後、全国的に分布の拡大が見られるものの、東北地方では大きな分布の空白地帯が存在していたが（環境省、2003）、最新の分布情報（環境省、2014）では東北地方における生息域が急速に拡大している事が示されている。

長くシカが不在であったこれらの地域では、被害対策をはじめとしたシカ管理に関する技術や知見が不足しており、また、特にこの地域の積雪等の気候条件に伴う生態特性に関する知見も不足している状態である。

不足する技術、知見について補完するため、従来からシカ管理に取り組んできた先行地域における各種知見を得るとともに、東北地方で取り組まれてきた調査やシカ管理施策について情報共有することにより、東北地方におけるシカ管理のレベルアップと、地域の特性に

適応したシカ管理の方向性について認識を深めることを目的に勉強会を開催した。

参加者：

東北地方自治体・・・青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県

オブザーバー自治体・・・茨城県、栃木県

国・・・東北森林管理局、東北地方環境事務所

有識者・・・岩手大学、岩手県環境保健研究センター、山形大学、森林総合研究所東北支所、
(同) 東北野生動物保護管理センター

(1)第1回

開催日：2018年12月21日

場所：岩手県盛岡市

主なテーマ：東北地方におけるニホンジカ保護管理の現状の共有

(2)第2回

開催日：2019年3月6日

場所：宮城県仙台市

主なテーマ：東北地方におけるニホンジカ管理の基本的考え方（モニタリング等）